

## サービスラーニングを取り入れた授業科目の評価運営方法

大橋 裕太郎† 山地 秀美†  
日本工業大学† 日本工業大学†

## 1. はじめに

今日、日本の教育現場では「コミュニケーション力」や「問題解決スキル」といった複合的で総合的な能力をどのように養成するかが議論され、数々の実践がなされている。その中で、「教育活動の一環として、一定の期間地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得る教育プログラム」であるサービスラーニング（以下、SL）が注目されている[1]。しかし、SLは一般的な講義と異なり「ソフトスキル」と呼ばれる技能が技術力とあわせて求められることや、活動が体験的・個別的事であることなどから、テストのような評価方法が適応できず、統一的な評価基準を作成することが難しい。情報（工・科）学分野では、人文社会学系と比較して実践事例がこれまで少なく、明確な評価枠組みも確立されていない[2]。

## 2. 「情報ボランティア」の取組み

筆者らが所属する情報工学科では、SLの考え方を取り入れた授業科目「情報ボランティア」を開講している（以下、本科目）[3]。本科目では、学生が地元の小中学校や高校、公的機関やNPOへ赴き、情報に関する業務に一定期間従事する。学生はこれまでに学んだ情報技術に関する知識や技能を応用しながら、コミュニケーションや問題解決の方法を現場での活動を通して学ぶ。授業科目という限定的な形ではあるが、地域の方々の協力を得ながら地域の情報技術環境の整備や情報教育の普及と質の向上に携わってきた。しかし、授業開始から20年を迎え、私たちを取り巻く情報環境が大きく様変わりする中で、地域の学校が何を求め、本科目を通じて学生に何を獲得させたいかを改めて整理する必要があった。

## 3. 研究内容

## 3.1 研究目的

本研究では、大学の情報系学部・学科におけるSLの評価運営方法について考察するために、本科目を事例とし、以下の2点を明らかにする。

- ・ 学生はどのような活動にどのように従事したか？
- ・ 学生はどのような基準で活動の成否を判断したか？

## 3.2 調査方法

本研究では、以下の調査をおこなった。

- ・ 小学校訪問と参与観察  
平成27年度に参加した14グループ（33名）のうち、時間の調整が可能だった9グループを選定し、担当教員（大橋）が活動先の小学校を訪問し、学生の実践を参与観察した。
- ・ 学生へのグループインタビュー

小学校訪問後、活動が終盤に差し掛かった時点でグループごとにインタビューを実施した。インタビューはそれぞれ30分程度となった。学生に話を聞く際、質問内容をあらかじめ決めつつ、話の流れに従いながら柔軟に会話を進めるインタビュー方法である半構造化インタビューを採用した。

## 3.3 分析方法

佐藤（2011）が提案する「事例ーコードマトリクス」を援用した。この手法は、事例の個別性や具体性に十分配慮しつつ一般的な規則性を見出す際に有効とされている[4]。

## 4. 分析結果

分析の結果、15種類の事例を抽出し、「計画」「実施」「コミュニケーション」「振り返り」の4つのカテゴリーに分類した（表1）。

表1 事例-コード マトリクス 各事例と各グループとの対応 (グループ1から9)  
Table 1 Case - code matrix: correspondence of cases to each group (group 1 to 9).

カテゴリー	事例	1	2	3	4	5	6	7	8	9
計画	現場を観察し問題(とその所在)を分析する	○	○	○	○	○	○		○	○
	時間や対象者の能力を見積もり, 計画を立てる	○	○	○	○		○	○		
	グループの中で役割分担を図る		○	○			○	○	○	
	授業以外の新しい仕事を計画し提案する				○					
実施	問題解決の方法を試行錯誤する	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	想定外の事態や仕事に柔軟に対応する	○	○	○	○	○	○	○	○	
	要求分析する, 依頼された仕事をこなす, 専門的知識・技術を提供する	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	うまくいかないことや失敗を経験する	○	○	○	○	○	○		○	○
	新しい技術や知識を習得する	○	○	○	○			○	○	
コミュニケーション	言葉遣いや教え方を工夫・比較検討する	○	○	○	○	○	○		○	○
	教職員と関係性を築く	○	○					○	○	
	児童と関係性を築く	○		○	○	○	○	○	○	○
振り返り	自分とは異なるユーザ層への意識・理解を深める	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	活動を振り返り, 評価や改善策を検討する	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	学んだことをどのように応用するか考える			○		○	○	○		
○の数		12	12	13	12	10	12	11	12	8
各グループの活動に対する自己評価 (○: 肯定的, ×: 否定的)		○	○	○	○	×	○	○	○	×

5. 考察

抽出された4つのカテゴリーは、品質管理などの場面で盛んに用いられるPDCAサイクルに類似している。すべてのグループが4つすべてのカテゴリーに該当する活動をひとつ以上行っていたことから、学生らは本科目を通じて継続的な業務の計画と改善の過程を経験したと考えられる。この4つのカテゴリーがPDCAサイクルと大きく異なる点は、「コミュニケーション」というカテゴリーが存在している点である。活動のあらゆる場面で教職員や児童とのコミュニケーションが重要であったことが伺える。

調査対象の9グループのうち、2グループは活動を否定的に評価していた(グループ5, 9)。2グループに共通していたのは、受け入れ側の教職員と関係性を築くことができなかった点(「コミュニケーション」カテゴリーの「教職員と関係性を築く」に該当する発言がなかった)と、事前の計画が十分に行えなかった点(「計画」カテゴリーの4項目のうち、該当する発言が1項目のみであった)、該当する事例の数(表1中の○の数)が10以下と少なかった点である。

一方、受け入れ側の教職員と関係性を築くことができなかったにもかかわらず全体の活動を肯定的に捉えていたグループも見られた(グループ3, 4, 6)。これらのグループは、教職員と関係性を築くことができなかったものの、活動

の自由度がある程度認められており、活動内容の決定権が学生側にある程度あった。このことから、受け入れ側とのコミュニケーションが十分に行えないことで計画や準備が十分にできず、かつ活動の自由度が低い場合、あるいは学生がそのように感じてしまった場合に学生グループは活動を否定的に評価してしまう傾向があると考えられる。今後、受け入れ先との関係性を強化しつつ、表1をベースとしてルーブリックを作成し、学生が活動を定期的に振り返り、活動の意味を見出せるような機会を持たせるといった対策が必要であると考えられる。

参考文献

[1] 中央教育審議会：大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)(2012).  
[2] Nejme, B. A. (Ed.): Service-Learning in the Computer and Information Sciences - Practical Applications in Engineering Education, pp.39-75, WILEY (2012).  
[3] 片山滋友, 青木収, 松田郁夫: 情報活用ボランティアによる教育効果, 情報処理学会第56回全国大会論文集, No. 4, pp.283-284 (1998).  
[4] 佐藤郁哉: 質的データ分析法 原理・方法・実践, 新曜社 (2011).